

三省堂 国語教育

# ことばの学び

a new way of learning Japanese



特集

語彙の  
拡充アイデア

vol. **16**

# 2008 小学校国語教育セミナー

第1回

概要決定!

主催 三省堂

## 「言語の教育—習得・活用・探究の具体にせまる—」

- 日時 2008年7月30日(水) 10:00~17:00
  - 10:00~11:45 シンポジウム
  - 13:00~15:30 ワークショップ
  - 15:45~17:00 文化講演
- 会場 中野サンプラザ
- シンポジウム「言語の教育—習得・活用・探究の具体にせまる—」
  - コーディネーター：尾木和英(ILEC言語教育文化研究所)
  - コメンテーター：角田元良(聖徳大学)ほか
- ワークショップ
  - A 協働で書く 大杉稔(高島市立今津東小学校)
  - B 「読むこと」の授業づくり 宮川健郎(武蔵野大学)
  - C 「読むこと」の挑戦 河野順子(熊本大学)
  - D 楽しく力のつく音読・朗読の授業 高橋俊三(前群馬大学)
  - E 読書のアニメーション 岩辺泰史(まなび探偵団アニメーションクラブ)
  - F 力のつく、楽しい説明的文章の授業づくり 吉川芳則(兵庫教育大学)
  - G フィンランド・メソッド入門 北川達夫(北欧文化教育総合研究所)
  - H メディア・リテラシーを生かした授業改善 中村敦雄(群馬大学)
- 文化講演 平松洋子氏(フードジャーナリスト・エッセイスト)  
「学びの世界をひろげる～食育・各国文化・地球環境,そしてことばへ」
- お問い合わせ先 三省堂 セミナー事務局(TEL 03-3230-9241)  
※お申し込み方法など詳細につきましては、  
4月下旬より小社Webサイト(<http://sanseido.co.jp>)にてご案内いたします。



# 2008 夏季教育セミナー

国語(中学校対象)  
英語 同日開催

- 日時 2008年8月1日(金) 10:00~16:00
  - 午前の部(10:00~12:00) 実践報告：水野美鈴・平川恒美・福本元恵
  - 午後の部(13:30~16:00) 講義・演習：尾木和英・篠田信司・三浦修一
- 会場 中野サンプラザ
- すぐ役立つ指導技法と身につく教養!  
終日研修・課題別ワークショップ
- 主催 ILEC言語教育文化研究所(<http://www.ilec.jp/>)

特定非営利活動法人(NPO)

**ILEC** Institute of  
Language,  
Education &  
Culture  
言語教育文化研究所

# ことばの学び

三省堂 国語教育

a new way  
of learning  
Japanese



vol. **16**

## CONTENTS

- 2 エッセイ 私の「ことば」生活 尾木 直樹

### 特集 語彙の拡充アイデア

- 4 言語活動との関係を意識化させる語句・語彙学習 安部 朋世  
8 あそび心が ことばをはぐくむ —「読書のアニメーション」からの提案 岩辺 泰吏  
12 俳句学習で言語感覚を磨き、語彙力を高める 今井 靖

### 実践交流

- 14 小学国語 作文を孤独な作業にさせない 兵庫県神戸市立岩岡小学校研修委員会  
16 小学国語 比べ読みを通して主題を深める授業 —「海のいのち」(六年)「比べ読み」の実践— 村川 圭子  
18 小学国語 他教科の学習や読書に生きるワークシートの工夫  
—六年「文章の構成を考えながら・宇宙からツルを追う」の指導を通して— 長尾 幸彦  
20 小学国語 スピーチ内容を文字カードにして見直す 牧 英治郎  
22 中学国語 論理的思考力をはぐくむ説明的な文章の学習指導の在り方  
—結論から読み取る実践を通して— 中島 聡  
24 中学国語 自分の考えを深める価値ある話し合い活動のための取り組み  
—「パネルディスカッションをしよう」(三年)の実践から— 山内 裕介  
26 中学国語 身に付けた力を生徒が実感する授業づくり  
—「読むこと」の指導における司書と連携した授業実践から— 前田 和子

- 28 授業のヒント“書写” 第2回 授業の10分間を利用して 谷口 邦彦  
30 ことばが辞書に入る瞬間<sup>とき</sup> 第2回 新しい辞書を手にして 市川 孝  
32 すてきな本たち ~子どもたちとのふれあいの中から~  
第2回 石井桃子さんの作品は、いつまでも 土屋 智子

- 33 編集後記

表紙イラスト  
園田カナコ

デザイン  
design Seeds  
瀬戸早苗

私の「ことば」生活

尾木 直樹



「ことば」は、私の生の証、生活そのものである。今日は静岡で、明日は大阪で講演。夜はホテルで二晩連続の原稿書き。

三百六十五日、こんな毎日の繰り返しである。しかし、これまで講演も、執筆も、文字通りの「繰り返し」はない。二千五百回近い講演も、百七十冊を越す著作も、すべて同じものはないからだ。

私にとって、「話すこと」と「書くこと」は、両方とも聴き手と読み手に向かって、「ことば」を武器に未知との遭遇を演出する「息づかい」そのものである。「話す」「書く」という動作によって、私の心を相手に届ける営みでもある。

したがって、私は原稿を読み上げる講演はしない。講演は、閉じられたペーパー空間を飛び出して立ち上がる舞台である。聴衆のうなずき、目の輝き、小さな表情一つから、その喜びを受けとめ、共感する。時には解説し、説得に入ることもある。たとえ千人規模の講演であっても、私は、会場の一人に向かって、「心」を「ことば」に置きかえて、音声として発する。心と心を共鳴させながら、一つのテーマを考え合う、それが講演である。

だから、居眠りしているお客様をそのまま見捨てて話し続けることはできない。

「先生の講演は、テレビで観ると全く違うんですね。こんなに面白いとは思いませんでした」とか、「深刻な話なのに、お腹をかかえて笑いました。声出し

おぎ なおき 法政大学キャリアデザイン学部教授。臨床教育研究所「虹」所長。早稲田大学大学院教育学研究科客員教授。最近の単著に『ケータイ・ネット時代』の子育て論』（新日本出版社、2008年1月）、『学校を元気にする50のルール』（三省堂、2008年4月）など。

て笑いながら聴く講演なんて初めてです」などと、どこでも同じような感想をいただく。

そのたびにうなずきながら、私はこうお話ししている。

「だって、テレビは無機質なカメラに向かってコメントするのですから。聞き手不在なんです。今日の講演は、皆さんと一緒につくったんですよ」

講演とは、話したいことを舞台俳優のように全身で表現して演ずることであるというのが、私の持論。

かつて著名な大学教授が、「私は、今日の講演のために、原稿を書いてきました。それを読み上げます」と言って、壇上でマイクを前に目を落として、九十分間ただひたすらに「朗読」した。聴衆の大勢が安らかな眠りについたことは言うまでもない。

難しい内容を、抑揚もなくただ棒読みで聴かされるのは、一種の精神的な拷問である。体が素直に反応して、聴衆は眠ることによって苦痛から逃れたのかもしれない。

それにしても、こんな講演は参加者に失礼千万。それなら、原稿をパンフレットにでもして配り、講義した方が親切だ。活字文字による表現にこだわるのであれば、それに徹して責任を持つべきではないだろうか。

しかし、私にも失敗がある。苦手の一つは国会における「意見陳述」である。ここでも、いつもの習

性で、各党の議員の目を見て、引きつけて話さないと意見陳述した気分になれないのだ。だから、レジュメは準備するものの、持ち時間の二十分はフリーで話す。すると、先日など、議員さんのあまりの反応の鈍さに驚き「プロフについてご存知の先生方、挙手お願いできますか」などとアクションを入れてしまった。「意見陳述」という責務からすれば、場外乱闘になってしまった。反省することしきりである。

私の講演では、常に「ことば」を立体化させることを心がけている。だから、演卓の前にじっと立っただままということは、ほとんどない。とにかくよく動く。時には階段を下りて、聴衆に意見や賛否を問う。また、視覚にも訴えるためにホワイトボードを使う。三千人相手でも、ステージ上をよく歩く。そして、書く。二階席から見えない。しかし、それでいいのだ。少しでも参加者に伝えようとする私の心を、「ことば」以外の「動き」によって立体化していくのである。

「先生、勇気が出ました」「元気をもらいました」立体的なアクチュアルな「ことば」は人々を元気にさせる「魔法の力」を秘めているのだ。

ところで、「書きことば」の方はどうか。いや、恥ずかしい。肝心のこちらの方について書くスペースがなくなっちゃったようだ。「書きことば」はごまかしがきかない。なんとも厄介である。

## 特集

# 語彙の 拡充 アイディア

## 言語活動との関係を意識化させる 語句・語彙学習

### 語句・語彙の学習をめぐる現状

外国語を学ぶ場合、学習者は対象言語の発音や文法とともに、語を一つ一つ覚えていかなければ、対象とする言語を理解したり表現したりすることができない。よって、学習する側にとっても指導の側にとっても、「語句・語彙の学習」の意義、すなわち、「対象とする言語を用いて表現・理解するための語句・語彙の学習」という意義は明確であろう。し

千葉大学  
安部 朋世

かし、母語を学ぶ場合、児童生徒はそれまでの日常の言語活動においてすでに一定数の語を獲得しており、学習場面で出会う「難語句」を除いて、語句・語彙の学習の必要性が認識されにくい。本稿の筆者が二年程前に大学生に対して行ったアンケートでは、「小中学校の国語の授業で語句・語彙についてどのような学習をしたか」という質問について、「ことわざ、故事成語、慣用句の暗記」「教科書に出てきた語の意味調べ」といった回答が多

くあり、具体的には、「辞書の早引き競争」「暗記して小テスト」といった印象において捉えられる傾向がみられた。五十人程の授業での簡略なアンケートではあるが、実際の国語の授業においては学習場面に応じた様々な言語活動との関連の中で語句・語彙の学習が行われていたとしても、学習者にとってそれは「辞書を引く」「普段使わないことわざ等の暗記」という完結された「語句・語彙の学習」として認識されており、言語生活につながっていく活きた言語活動との関係までは意識化されていないと考えられるのである。

### 類義関係と表現・理解

語句・語彙の学習においては、文章中に出てくる語がその文章の中でどのような意味を表すのかといった「読むこと」などの学習活動の中で行われる場合と、類義語や対義語を集めるといった、語そのものを対象として学習を行う場合とが考えられるが、後者の場合、学習者の側に、実際の言語活動との関連が見えにくくなることが多い。「類義語や対義語の学習が実際に読んだり話したりするときにどう活かしてくるのか」ということが学習者の側で意識化されなければ、その学習は、「語句・語彙のための学習」に止まってしまう。類義語学習の意義は、類義関係の語を集め

ることにより語の量的な知識を増やすことだけでなく、類義関係にある語の意味の違いを比較し把握することにより、語の意味理解を深めることにある(注1)。例えば、渡辺(一九七〇)は、「経験と言語との対応を、自覚的に認識する」方法として、類義語の対比による意義分析の有効性を述べている。「さむい」と「つめたい」はともに「低温」を表すことは共通するが、「さむい」は、「さむい朝・冬・国」といった用例が挙げられることから「直接の接触感覚を伴わずに感じる低温」、「つめたい」は、「つめたい氷・飲み物・ベッド」等々の例から「直接の接触感覚を伴って感じる低温」だとする分析ができる。このように、語の意味を「低温」「接触感覚の有無」といった要素、すなわち、その語の「意義特徴」の「束」として捉えることにより、語の意義をより明確に把握し、いわゆる「語感」の問題として終わらせてしまわずに、その違いをよりの確に認識することが可能となる(注2)。

こうした「意味の差」に意識的になることは、語の意味理解の深化や語彙体系の理解だけでなく、学習場面での言語活動にもつながりを開くことになる。例えば、語種の学習において、「調べる・調査・リサーチ」のような似た意味を持つ語が「微妙な感じの違い」

を表現することを理解したり、児童生徒が自分で書いた文章の推敲をするときに、文脈等から考えて、近い意味を持つ語の中からより適切な語を選択したりすることは、類義語の学習が言語活動につながる例である。

また、このような意味の差に意識的になることは、表現に関わる重要な観点の一つである「相手や内容に応じたスタイルを選択すること」にもつながっていく。例えば、議事録などを書く際に、

(例) 会議で反対意見を( )。

の( )に入る表現として「言った」と「述べた」のいずれが適切か。あるいは、レポートを書く際に、

(例) ①やっぱ、自然を大切にしくなくちゃって思う。  
②やはり、自然を大切にしなければ

ならないと考える。

のどちらがふさわしいのか。さらには、例えば発表会の招待状を地域の方に出す際に、

(例) ①ぜひいらしてください。

②どちらを選ぶのか。といったことは、相手の違いや文章の種類・文体に応じた語句を選択しようとする意識が働いているものと解釈できる。話しことばと書きことばの違いや、小説、レポート、手紙などといった文章の種

類の違い、さらには相手による違いを理解し、内容や相手に応じたスタイルを選択する力を伸ばすための指導の手がかりの一つとして、語の意味の差を意識化させる語句・語彙学習に注目することができるだろう。

語の意味を理解する際に、例えば『のどか』は『のんびり』と同じような意味である」といった、既知の語への「言い換え」で終わらせてしまつては、意味理解の深化にはつながらない(注3)。しかし、「相手に応じた語の選択」という観点から考えると、「言い換え」が重要となつてくる。「相手に応じた話し方」というと、教師が子どもが発達段階に応じた表現でやりとりを行う「ティーチャー・トーク」や、母語話者が非母語話者に対して行う「フォーリナー・トーク」(注4)などが想起されるが、その場合子どもは「合わせてもらう側」であることが多いかもしれない。しかし、一般のコミュニケーションにおいては「相手に応じた話し方」が重要になる。国語の学習においては、例えば「新入生に学校生活を紹介しよう」といった言語活動の際に、上級生にとっては当たり前を使う語が、新入生にとってわかりやすい語であるかどうかを考え、適切に語を選択する必要が生じてくる。ここでは、類義関係にある語群に注目することで、適切な語の選択が可能になるのである。

一方、言語の理解の面においても、「類義関係にある語の意味の差」に注目することにより、「文章・談話を批判的に解釈する」力につなげることが期待される。例えば、地球温暖化についての文章を読むときに、

(例) ①温暖化の影響で、穀物の収穫量が下がった。

②温暖化の影響で、穀物の収穫量が落ち込んだ。

のいずれの表現が用いられていても、「下がる」「落ち込む」は、ともに「収穫量の減少」を表現する語として共通する意味を有し、その語自体はいわゆる「難語句」ではないことから、受け手はその語に注目することなく読み過ごしてしまいがちである。しかし、実際には、「下がる」と「落ち込む」では「収穫量の減少」に対する印象が大きく異なる。つまり、受け手は無意識のうちにこの「印象」を受け取ってしまう可能性があるのである。このような場合にも、「類義関係にある語の意味の差」に意識的であれば、「表現者の意図」あるいは「表現者が無意識に選択した語であったとしても当該の表現が用いられることで結果として生ずる意味」を読み取ろうとする意識が働くであろう。このように、理解の面においても「類義表現の差」に意識的になることが様々な場面で有効なのである(注5)。

## 「フレーム」と表現・理解

次に、認知モデルの一種である「フレーム」の観点から、語彙指導と学習における言語活動との関わりについてみていきたい。

三省堂中学校国語教科書『現代の国語1』に掲載されている別役実の「空中ブランコ乗りのキキ」は、次のような文章で始まる。

そのサーカスでいちばん人気があつたのは、なんといっても、空中ブランコ乗りのキキでした。

サーカスの、大テントの見上げるように高い所を、こちらのブランコからあちらのブランコへ、三回宙返りをしながらキキが飛ぶと、テントにぎっしりいっぱいのお客様は、いつも割れるような拍手をするのです。

この文章には一見して難語句は見あたらず、語句の面で解釈が困難になることはないように思われる。しかし、もし「サーカス」がどのようなものかを全く知らないという想定で、この文章を読んだらどうだろうか。一般的な語義としての意味をつなぎ合わせることで一応の解釈をしたとしても、なぜこの場に「大テント」が出てくるのか、また「こちらの

ブランコからあちらのブランコ」というのはどういう状況を指すのか、などの実質的な意味がわからず、文字面として一通りはわかるが、どうもイメージの湧きにくい文章になってしまうだろう。実は、こうした例と似た状況は、わたしたちが外国文学や古典の文章を読むときにも起こっているのである(注6)。

認知言語学の分野では、認知モデルの一種として「スキーマ」「フレーム」等と呼ばれるものがある。それは、複数の概念が構造を持って結びつけられたものであり、例えば「家」のフレームとしては「戸」「窓」「屋根」「扉」「部屋」などの概念が結びつけられており、「誕生パーティーへの招待」というフレームとしては、「ケーキとろうそく」「ごちそう」「ゲーム」「プレゼント」などの概念が結びつけられている。

(例) ①メアリは、ジャックの誕生パーティーに誘われました。

②彼は風が好きかしら、と、彼女は思いました。

において、①②をひとまとまりの連続した話としてみた場合、「風」を「ジャックへのプレゼント」と解釈するのは、「誕生パーティーへの招待」というフレームが活性化されるためだと考えられる。つまり、私たちが言語で表現されたものを理解するときには、語の表

す概念の関連性―フレームを利用して効率的に解釈していると考えられるのである(注7)。これらより、語句・語彙の学習においては、語を把握する際のフレームの重要性を指摘することができる。「過去の経験や教養や現在の精神の志向性のすべては語いに関係」するという認識(注8)は、経験や知識がフレームを身に付けていくことにおいて重要な役割を果たしていると考ええることによるものである。国語教育における「意味マップ」(注9)の活用は、このような観点から捉えることが可能だと思われる。

### 言語活動とのつながりを意識した学習

以上、語句・語彙の学習内容と実際の言語活動との関係について、類義関係とフレームを例に考えてきたが、実際に語句・語彙の習得は、日常生活における言語活動と密接に関連しているといえる。次期学習指導要領(注10)の方針を示す「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」(平成二十年一月十七日、中央教育審議会)においても、現行の学習指導要領で「言語事項」に位置付けられていた「語彙」について、「発音・発声、文字、表記、語彙、文及び文章の構成、言葉遣い、書写などについては、実際の言語活動

において有機的にはたらくよう、関連する領域の内容に位置付けるとともに、必要に応じてまとめて取り上げるようにする」(P76)とされるように、語句・語彙の学習は、今後これまで以上に、実際の言語生活における言語活動との関係が問われるようになるだろう。学習内容と実際の言語活動とのつながりを具体的に示し、それを意識化させることによって、学習者は語句・語彙の学習を必要なものとして認識し、積極的に学習に取り組むことができる。そしてそのことは、語句・語彙の学習を基盤とした国語力の総合的な向上にも結びついていくものと考えられる。

### 注

- 1 宮島達夫(一九六〇)「語い教育の諸問題」『教育』一三三号、柴田武(一九六五)「語彙指導への提言―「関連語句」と意味的分析―」『高校国語教育』五号、渡辺実(一九七〇)「語彙教育の体系と方法」『講座正しい日本語 第4巻 語彙編』(明治書院)等。
- 2 渡辺実(一九七〇)。
- 3 興水実(一九六六)「語句指導の改造」『教育科学国語教育』九七号等。
- 4 橋内武(一九九九)「アコモデーション理論」『ディコース 談話の織りなす世界』(くろしお出版)。

5 ある言語の文法現象や語彙が談話の中でどのような役割を果たすのかを研究した文献に泉子・K・メイナード(二〇〇四)『談話言語学』(くろしお出版)がある。また、談話に含まれる潜在的な意味を読み取り、談話に隠された権力性を問題とする研究に「クリティカル・ディコース分析」がある。泉子・K・メイナード(一九九七)『談話

6 分析の可能性』(くろしお出版)等を参照されたい。英語の読解に関する指摘については、谷口賢一郎(一九九二)『英語のニューリーディング』(大修館書店)等を参照されたい。

7 金水敏(二〇〇〇)「世界の認識と意味」金水敏・今仁生美(二〇〇〇)『現代言語学入門4 意味と文脈』(岩波書店)。例文も同。なおパーティフレームについては、マーヴィン・ミンスキー/安西祐一郎訳(一九九〇)『心の社会』(産業図書)に基づく。

8 倉沢栄吉(一九七四)「語い指導の意義と方法」倉沢栄吉編『国語教育の実践的課題 語句指導と語い指導』(明治図書)。

9 塚田泰彦・池上幸治(一九九八)『語彙指導の革新と実践的課題』(明治図書)。

10 二〇〇八年二月現在。

あべ ともよ 千葉大学教育学部准教授。専門は日本語学。日本語文法論に関する研究とともに、国語科における言語事項の教育にも関心を持ち研究を行っている。

# あそび心が「とばをはぐくむ」

## 「読書のアニメーション」からの提案

まなび探偵団アニメーションクラブ

岩辺 泰吏

### 一 みんなちがつて みんないい

「みんなちがつて みんないい」——訓話でよく言われることばだ。たしかにそうのだが、今の日本はそうではない。みんなと同じでなければ不安なのだ。一人ひとりが違うのだ、私は私でいいのだということになつてくることができる機会さえ、なかなかないものだ。正解は一つ、余分なことを考えるのは無駄、ましてや疑問をさしはさむのは愚かな行為、みんなへの迷惑なのだ。

語彙を広げる「ことばをはぐくむ」というとき、そういう「ブレイク」を取り外すやわらかな安心の「学びの場」が必要だ。そのためにアニメーションという「遊び心」を提案したい。アニメーションとは何かという論は別の機会にさせていたたくとして、ここではこう述べておくだけにしたい。アニメとは魂、アニメ

マシオンとはその魂に元気を吹き込み生き生き・ワクワクと活性化させること、その具体的な活動であると(注1)。

まず、短いことばを書きぬいたカードを組み合わせて詩を作る遊びから。

こやま峰子詩集『ぴかぴかコンパス』(大日本図書、一九九一年)より。

#### 傘

雨をあびて 花 ひらく

雨の中に傘が開くのはまるで花のようだという情景だろう。二行に書き分けられた詩。

これを、四枚のカードに書き分けて一組とし、チームで話し合って並べて、一編の詩を作る。

六年生の教室でやってみた。三十九名を十一のチームに分けたが、七通りの詩ができた。それぞれに説明をつけると、同じ作品であつ

ても考え方は違う。最初のことばがタイトルである。\*印はそのチームの説明。(友人の教室を借りて行った授業なので、説明をくわしく書き直してもらおうなどということには及ばなかった。以下、今回紹介する実践は同じような状況で進めたもの。)

「傘 雨をあびて／ひらく／花」——①

\*花を最後にすることで、傘が花のようだということを強調したいから。

\*傘はひらかないと雨をあびないから。題名の傘は花の例えだと思う。

\*傘は上から見ると花みたいだから。  
\*傘は花のように大きくひらいて花のようなきれいな色だから。

「傘 雨をあびて／花／ひらく」——②

\*水がないと花が成長しないから。

\*花という題名だと関係があまりなくなってしまうから。

「雨をあびて 花／傘／ひらく」——③

\*どっちも雨をあびてひらくものだから。

「雨をあびて 傘／花／ひらく」——④

\*雨をあびて傘をひらく。雨をあびて花がひらく。

「花 傘／ひらく／雨をあびて」――⑤

\*たぐさんの傘がひらいているところを上から見たときの様子を「花」と表していると考えたから。

「花 雨をあびて／ひらく／傘」――⑥

\*雨をあびて花がひらいている様子。傘は花びらをたとえている。

「ひらく 花／傘／雨をあびて」――⑦

\*花と傘が雨をあびてひらく。

(江戸川区立篠崎第四小学校六年)

「詩の一行を入れかえたりすることで、意味が少し変わったり、全く違ったりすることが不思議でした。そして、発表では、詩の一行の位置が同じで理由もほとんど同じであったり、位置も理由も違うという結果を見て、人の考えは人それぞれだということを知った。」という子どもの感想が共通する思いを表していた。

また、「みんなそれぞれ違った詩ができていたので、詩はことばをつなげて無限に作れるものなんだと思いました。」という感想も出ていた。

わずか四枚のカードに書かれたことばで

も、多様な表現を生み出し、多様な考えを抱擁することができている。それを具体的な場面で実感できたと思う。〃ちがいを個性としてことばの包む豊かさにおいて発揮させる、そういう誘いかけのゲームとしてとらえてほしいと思つて提起している。

ちなみに、教員研修会でもやっているが、どうも、教員は作者に近いものを「正解」として近づけようとする志向が働いたためか、多様性に欠けることが多い。

## 二 絵から物語を生む

谷内こうた作『かぜのでんしゃ』（講談社）は、見開き十六場面のうち、十一場面が絵だけで展開されている。

「めを とじて／めを とじて かぜのおとを きこう／とおくから／ほら とおくから やつてくる／かぜのでんしゃ」



『かぜのでんしゃ』  
絵と文=谷内こうた  
講談社／1982年、新装版2003年

という五ページの後に、男の子がその電車に乗って草原を走り、トンネルをくぐり、夜の空にのぼって、雲の波をぬけ、明るい草原にもどって、電車と別れる。「フルートかチェロのソロ音楽だけでページをめくるように……」と谷内さんは「あとがき」に書いている。各チームに一冊ずつの絵本を渡し、前後を確かめながら担当ページにことばをつけてもらう。そして、みんなで（紙芝居風に）順につけたことばを読んでいくと、一つの物語ができる。これも、さまざまところで行ってきた。教員の研修会ではさすがに詩的な情緒ある作品が出てくるが、ここでも、子どもたちの作品はすばらしい。

1. 風の音／サー、サー、サー、／電車の音／ガタンゴトン、ガタンゴトン、／風の音、電車の音がかさなり／電車は動く。
2. あっ！ 橋だ。ガタン、ゴトン。
3. そして、山の中のトンネルへ
4. やつと見えた。出口だ 出口。ガタンゴトン、ガタンゴトン。
5. ガタンゴトン／「あ、もう出口だっ！」

6. 「あつ トンネルから出た。」／「月が出てる。きれいだなあ」

7. 風をきって進んでいく

8. 雲より上にいった。／目をとじて、風にあたった。／「きもちいい」／「もうすぐ家かなー」

9. あ、野原が見えてきた。

10. もう そろそろおわりだ。

11. ぼくは、最初に乗った木のところにもどってきた。／ぼくはでんしゃからおりた。／でんしゃはかえっていった。／そして、ぼくのでんしゃのたびはおわった。

（鹿児島県垂水市立協和小学校五年）

この文だけでも、場面はだいたいおわかりいただけると思う。とても素直で情感のある表現である。垂水市は大隅半島の中ほど、鹿児島湾に面し、みかん山を背にした細長い地域だ。桜島が父親のごとく常にどっしりと座っている。月もきれいにのぼることだろう。豊かな自然に囲まれていても、それを感じとれる暮らしがあり、また、自由な表現をはげ

ましていく日頃の学級・学校づくりが支えていなければ、ことばは育たない。この五年生たちの詩的といえる表現がすつと出てくるかわりあい、とてもあたたかいものを感じた。

同じ活動をした六年生のクラスの感想には、こんなことが書かれていた。

「みんなと協力すると、一人じゃ考えてなかった意見が出たので、こういう考えもあるんだなあと思いました。様々な意見が出ておもしろかった。字のない本に字を書くと、一人で考えるとわかんないけど、みんなと協力して楽しかった。」

「絵と文がなかなかあわなくて大変だったけど、最後はちゃんと次の文ともつながったのでよかったです。」

「自分の意見を書くことはむずかしいけど、それをみんなが発表しあうことができて楽しかったです。」

「十一チームの文がつながってすごかったです。最初はつながらないと思ったけど、つながってよかったです。」

「たった一つの文を考えることがこんなに大変なんだと気づきました。」

ばらばらで考えたのに、つながって一つの物語が生まれていったという感動は、自分たちのことばが生み出したのだ。

### 三 絵から詩を生む

とくに、ことばの学びの場では何かとりかかり（拠りどころ）が必要だと思う。ハードルを低くして、ことばが生まれやすい、ことばをひきだしやすい環境を設定することが必要だ。絵本『かぜのでんしゃ』による物語作りなどはそういう考えに基づいている。

こやま峰子詩集『かぜのアルバイト』（朔北社、二〇〇三年）から、各グループに一つずつの詩を読み聞かせ、一周した後にそれぞれの詩に描かれていた絵を示す。それらの中から自分のチームにふさわしい絵を探し出すのだ。そうして、絵と詩との結びつきを意識させる。このウォーミングアップが、次の創作活動を誘い出す上に大事だ。それから、二枚の銅版画を見せる。そのどちらかを選んで、短い詩を考えようという活動だ。全員の作品を紹介することができるのが残念だが。

静かな町の すてきなライブ

はるな

静かな町に ひびく音

明るい光にてらされて

ゆうがな音をひびかせる。

ステージいっぱい広がる光

ゆっくりまくが開いて

自分だけのステージだ。

ぼくの夢

ゆうたろう

ぼくの夢は  
作曲家になること  
楽しい音楽で  
みんなを元気にしてあげたい

僕の夢は

鳥になること  
鳥になって  
大空を飛びまわって  
世界を知りたい

自由

あやか

ぼくが何を考えたって  
自由

鳥になりたいと思ったって  
いいんだ  
心の中では自由なんだ  
冬、ぼくは新しい  
自由をまたひとつ  
みつげだす

(江戸川区立篠崎第四小学校六年)

皆さんはこれらの作品から、どのような絵を想像するだろうか。一枚一枚、絵はちがつていように思える。二枚の絵から生み出されたとはとても思えない。十二歳の心の中に、小さな刺激が多様な豊かな作品を生み出す(注2)。

このような活動(アニメーション)を通してみると、子どもたちは内側にたくさんのことを蓄えていることがわかる。今の教育は、内に内に蓄えるだけの活動になっているのではないだろうか。子どもたちは蓄えたことばの力をたしかめる機会に恵まれていない。それは、テストとか作文とか、スキル化された「発表(話し方)」などに「学力」として収斂されてしまう。人とかかわりを深め、この世界とのつながりをたしかめ、生きる力をあげまし豊かにしていくところのことばの役割がある。そういう「かかわり」の具体的な活動場面の中で、頭から出して・声にし・文にし・物語にしていく。ことばというものが人と人を結び、人とこの世界とを結んでいく確かな力を持っているものであることを身体化していきたい。

今回、「私のことは・辞典」づくりについても触れられないことが残念だ。語彙学習がえてして国語辞典の書き写しで終わっている。対象をもっと自分に引きつけて、仲間を

意識しながら、自分(自分たちの)のことで表そうとすることが必要だ。与えられた解釈で満足してはいけない。共通語に対して地方語があるように、わたし語があるのだ。これは『ことばの教育と学力』(明石書店、二〇〇六年)に提起しているのでぜひご覧いただきたい。

注

1 拙編著『ぼくらは物語探偵団〜まなび・わくわく・アニメーション〜』(柏書房、一九九九年)、『チヨークで書く「希望」』(大月書店、二〇〇六年)を参照ください。

2 用いた絵は「しろいつえ」(P43)、「ろうそく」(PP44-45)。私はこの原画を購入してある。

※本稿で取り上げた児童名はすべて仮名です。

いわなへ たいじ まなび探偵団アニメーションクラブ代表。東京都の小学校在職中から「読書のアニメーション」研究会を主宰、退職後、クラブの月例会及び各地でのワークショップで普及に努めている。

# 俳句学習で言語感覚を磨き、 語彙力を高める

群馬大学教育学部附属中学校

今井 靖

## 1 はじめに

通常、語彙力を高めるには、「漢字」「ことわざ」「慣用句」「四字熟語」「故事成語」「類義語・対義語」「同音異義語」「同訓異字」などの指導が挙げられる。

しかし、前述の指導を丁寧に行い、語彙を習得させる必要性は十分認めつつも、あえてここでは、「言語感覚を磨く」指導について述べることにする。なぜ言語感覚かといえば、語彙習得の中核を成すものとして言語感覚が重要だと考えているからである。

## 2 俳句は、粹なことば遊び

言語感覚を磨くには、「ことば遊び」が有効である。ことば遊びは、駄洒落、語呂合わせや早口ことばのように、楽しみながら自然と言語感覚を習得できるものが多い。

特に、江戸時代には、駄洒落（自嘲的な言い方だが）のことを「地口」といって、粋な男性の嗜みであったともいわれている。同時に、冗談話（ジョーク）も大切な素養だったらしい。そこから、俳諧が生まれ、川柳や俳句が発展したとするならば、まさに俳句は「粋なことば遊び」である。ちなみに、和歌（短歌）にも「掛詞」「縁語」「序詞」「枕詞」といった一級品のことば遊びがあるのだが、ここでは割愛させてもらう。

つまり、俳句には「粋の文化」が息づいている。すべてを語り尽くさず互いの共通感覚を前提としたことばのやり取りがあるのだ。「ツ」と言えば「カー」といった合意システムや「松に鶴」「梅に鶯」「紅葉に鹿」といった連想ゲームが存在しているのである。これこそ日本特有の言語感覚であり、共通感覚ではなかるうか。

## 3 俳句鑑賞のツボを示す

最近の教科書では、俳句を取り立てて指導する場面が減ってきている。確かに、短歌や俳句についての指導事項は、学習指導要領の中に明記されていない。しかし、私は俳句学習にこそ語彙力や言語感覚を高める効果があると考えている。

古池や蛙飛び込む水の音

芭蕉

私は、右の俳句を俳句の説明のためによく用いる。誰もが知っており、それでいて最も俳句らしい作品だと考えるからである。何気なく読んでしまえば、「ああ、蛙が池に飛び込んだのか。ふーん。」で流されてしまう。

しかし、一語一語のことばに着目して、よく考えてみよう。この俳句は、事実の描写（写生・情景描写）である。そして、事実の描写から作者の心情を推測させているのである。鑑賞を深めるための発問としては、

- ①「古池」が内包しているイメージの広がり  
↓池の大きさ、周囲の様子など
- ②「蛙」が内包しているイメージの広がり  
↓蛙の種類、大きさ、色、数など

③「蛙飛び込む水の音」という部分が内包しているイメージの広がり

↓水の音の大きさや余韻など

これら一連の思考過程から連想されるのは、「静けさ」である。そして、「静かだ」ということばを用いずに静けさを表現することで、奥行きを感じさせているのである。だからこそ、言語感覚を研ぎ澄ます場面であるとともに、「古池に」ではなくて「古池や」と切れ字を用いる効果も理解させられる。

万緑の中や吾子の齒生え初むる 草田男

この俳句には、二つの物が詠み込まれている。一つは遠景としての「万緑」と、もう一つは近景としての「吾子の齒」である。

一見何も関係ない物がドッキングしているこの句は、この本質を見抜いた鋭い洞察力が必要となることがある。この句では、万緑と吾が子の成長が重なり、生命力への感激が込められている。たとえるならば、大喜利などで行われる「謎掛け問答」と同じである。「この季節の万緑と掛けて、前歯が生え始めた吾が子と解く、その心は…生命力に満ちあふれています。」といった言語感覚である。

#### 4 五七五のクロスワードパズル(創作)

俳句学習の醍醐味は、鑑賞だけではない。実際に自分で創作することによって、ことばへの執着心が生まれ、言語感覚が磨かれる。そして、創作することで語彙力も高まる。

俳句は限られた音数の中で、最大限の余韻を漂わせる表現をしなければならぬ。だからこそ、一つ一つのことばを精選し、推敲し、句を紡ぎ出していく。その過程の中で、効果的なことばを選び、見出し、使用するといったことばの評価活動が行われている。

この段階になると、ことばの重要性を感じ、「季語」が存在する意味も理解されてくる。そこで、資料集(便覧)や歳時記、国語辞典を用いて創作させていくのである。

##### 【指導のポイント】

- ①感情の直接表現(形容詞・形容動詞)を用いず、事実の描写(情景や行動の描写)によって、間接的に心情を推測させる句にすること。
- ②「季語」が内包しているイメージから想像力を働かせる句にすること。
- ③最も余韻が残るであろう語順に配慮して句を組み立てること。

#### 5 おわりに

俳句学習は、語彙(ことば)を探索していく学習である。指導計画の終盤に、「句会」を開いて互いに批評し合うことを薦めたい。

「上の五音と下の五音を入れ替えたほうが余韻が残るよ」、「寒い朝よりも白い息のほうが写実的だよ」、「別の季語はないのかな」などと互いの俳句を基にして考えを述べ合うことで、語彙(ことば)への感覚が鋭くなる。

互いの俳句から語彙に関する「情報を取り出し」、語彙について「解釈」し、語彙について「熟考・評価」し合い、さらに良い句へと高めさせるという過程は、PISA型読解力の育成にもつながるだろう。

そして、完成した句をクラスの俳句集などにすれば、生徒の感慨もひとしおだと思う。

いまい やすし 群馬大学教育学部附属中学校教諭。  
国語科の授業は、「教科書だけに頼ってはいけない」と考え、学習素材を探している毎日。生徒と共に国語力を磨きたいと願っている。

# 作文を孤独な作業にさせない

兵庫県神戸市立岩岡小学校研修委員会

本校は、平成十七年度より三年間、文部科学省「学力向上拠点形成事業」の指定を受け、「基礎・基本の定着を図る―書く力を高める指導法を求めて―」という研究主題を設定し、作文指導法を深める機会を得た。そして、十九年十一月二十七日、研究発表会（公開授業）を開いた。次は、参加者の感想である。

- ・ 作文をクラス全員で指導して進めることができることを学びました。
- ・ 作文を一人一人の孤独な作業にしない工夫の数々に感心しました。
- ・ 「もっと書きたい」「(授業)延長したらいいやん」という子どもたちの言葉に指導の成果を感じました。スキルを身につけることが自信につながり、作文を好きにさせているのだなと思いました。

評価する声をたくさん聞くことができたが、これから、わたしたちの基本的な考えと原則的な指導過程について述べたい。

## 一 基本的な考え

最も大切なこととして、「書くことを孤独な作業にさせてはならない」と、全職員で確認している。そして、そこから導かれた授業形態が一斉指導である。みんなの知恵を出し合いながら、構成計画から書き上げるまでの全過程を一緒に体験する中で、苦手な子どもたちも少しずつ書く作業の要領を得るようにしている。

また、上手な作文を書かせることよりも、書くことの抵抗感を取り除く指導を優先させている。それは、子どもたちだけでなく、教師自身も、「素晴らしい作文を」「光る表現を」という呪縛から解放されなければならぬことを意味している。

書くことの抵抗感を取り除かせる最も有効な方法は、長い作文を体験させることである。何枚書けたかは、子どもたち自身にも一目で分かり、自信につながる。だから、発想を転

換し、早い時期に一定量の作文を書かせたい。無謀なようだが、指導の工夫でそれが可能であることは、本校の一部で既に試みた実践例があったので、案外早く教師集団の共通認識になった。

## 二 原則的な指導過程

職員研修を積み上げ、原則的な指導過程を次のように設定し、実践を進めている。

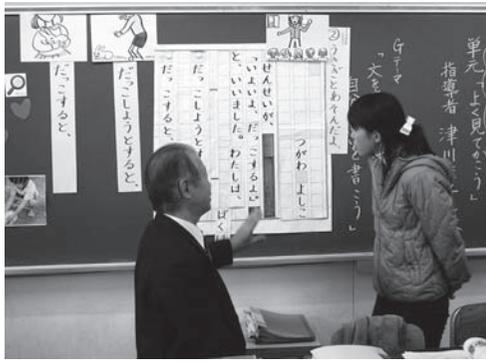
### (1) 構成計画を立てさせる

課題に対してどのような内容にするかみんなで討論し、共通の計画を立てさせる。次の例は、三年生四月に書かせたものである。

【題】わたし(ぼく)

- ① すきなべんきょう
- ② すきなあそび
- ③ すきな本
- ④ すきなテレビ
- ⑤ すきな食べもの
- ⑥ すきなどうぶつ
- ⑦ とくいなこと
- ⑧ 自分のいいところ
- ⑨ 自分のなおしたいところ

原則として一つの項目が一段落になるの



で、この場合は九段落の作文を書くことになる。段落の多い分、それまで一〜二枚しか書けなかった子も、ちよつと頑張れば、三〜四枚以上の作文が可能になる。段落があるので、整理された、読みやすい文章になりやすい。

(2) 構成計画に従って作文用紙に書かせる

① 題名・氏名を書かせる

必要のない迷いを招かないための約束事として、例えば、長い題名は上の二マス、短い題名は三マス空けさせるようにする。そのマスを黄色の色鉛筆で塗らせる。

二行目の下方に氏名を書かせる。例えば、名字と名前の間、名前の後を一マス空けさせ、黄色に塗らせる。

② 段落の初めの一マスを空け黄色に塗らせる  
一斉に塗らせ、みんなを同じスタートに立たせる。クラス全体に一体感をもたせ、苦手な子どもたちも引き込む。

③ 一つの構成部分(段落)を書かせる

苦手な子どもたちを置き去りにしないよう、次のような手立てを講じながら進める。

- ・書き始められない子のために、出だしの言葉や文(リード文)を例示する。

- ・書き進めやすくするため、ヒントとして、

「先生ならこう書く」というような「例えば作文(口頭作文)」として、作文形式の語りを入れる。

- ・「この子は、こんなことを書いているよ」「これは面白い」などと、好ましい情報を伝える。

- ・会話文を入れると文章が生き生きしてくることがあるので勧める。会話文を入れて改行することによって生じた空白マスを黄緑色の色鉛筆で塗らせる。段落の黄や、会話文の黄緑の色塗りによって、作文用紙には意味のない空白はないことを教える。

- ・早く書き終わった子から指名して読ませ、まだ書き続けている子の参考にさせる。聞きながら書くことを認め(勧め)、作業をストップさせない。

- ・発表が終わったら、推敲や校正をさせる。
- ・一定の時間がたったら、「そろそろ終わりましたよ。今書いている文までです。あまり書けなかった人は、次の段落でたくさん書くようにがんばりましょう」と声をかけて終わらせる。時間を切ることによって、緊張感が生じ、一定のスピードで書く力を育てる。「次の項目(段落)では、もっと書くぞ」という意欲をもたせることが大前提。

④ 段落の残りのマスを黄色に塗らせる

原則として、これが全員できてから次の落書きを書かせる。一斉指導の大原則である。

②〜④の作業を繰り返して、最後の項目(段落)まで書かせていく。

(3) 全体の推敲・校正と読み合いをさせる

個人の推敲・校正が終わってから、子どもたちどうして読み合いをさせ、間違いや分りにくいところを指摘し合うようにさせる。

だが、その子独自の個性的な優れた表現を変えさせられる場合があるので注意する。特に、成績上位の子が下位の子に指摘した場合。

こつべりついわかしようがつつう 「岩岡小学校 作文指導の全体像」について、資料をホームページに掲載しています。(URL = <http://www.kobe-c.ed.jp/iwo-es/>)

# 比べ読みを通して主題を深める授業 ―「海のいのち」(六年)「比べ読み」の実践―

大阪府大阪市立内代小学校  
村川 圭子

## はじめに

小学校学習指導要領解説の中に「読む活動を広げるためには、目的に応じて、音読や黙読、速読や比べ読みなど、さまざまな読み方を適宜用いることができるようにすることが大切である。」と書かれている。

その中の「比べ読み」の実践について述べてみたい。

まず、比べ読むために、どんな作品を教材として選ぶのかであるが、例として、次のようなものが考えられる。

- ・ 同じ作者で題材(話題)の違う作品
- ・ 違う作者で題材が同じような作品
- ・ 違う文種で題材が同じような作品などである。

さて、本教材「海のいのち」(東京書籍)は、作家の立松和幸の作品で、「人と自然との共生・一体化」について訴えている。

ところで、同じ立松氏の作品に、「山のいのち」(ポプラ社、一九九〇年刊)があり、この作品も自然と人間との共生を主題にしている。取りあげている海と山の自然や生き物に違いはあるものの、作者の訴えは共通している。

そこで、「山のいのち」を副教材とし、表現の細部に着目しながら類似点や相違点を比べ読みことにより、主題に対する考えを深めていくことができると考えた。

## 一 授業のポイント

比べ読みを通して物語文の確かな読み力を育てる本授業実践のポイントを次のように考えた。

- (一) 比べ読みの視点を明らかにする。
- (二) 二教材「主教材『海のいのち』と副教材『山のいのち』」を比べ読み、作品の読みを深める。

## 二 授業の実際

### 単元目標

○ 主題について考えを深め、人物の生き方や考え方について興味・関心をもつ。

・ 表現の細部に着目し、比べ読みを通して人物の心情を的確に読み取ることができる。  
・ 主題について考えたことを理由や根拠を明らかにして話したり書いたりすることができると考えた。

### (一) 比べ読みの視点を明らかにする。

比べ読みの視点を明らかにするために、下表のような「比べ読みガイドカード」を作成した。

このカードに、「比べ読みのポイント」を示したことで、二教材「海のいのち」と「山

比べ読みのポイント		比べ読みガイドカード ☆いのちの何をどのように比べるとしよう。	比べる言葉 ○海と山の「めぐみ」「生き方」「いのち」
比べる視点① 比べる視点② 比べる視点③	あらすじ 人物の人物柄 書きぶり		
比べ読む方法 ○情景描写や心情描写に着目して、人物の心、考え、生き方を読み取る。			

のいのち」の比べ読みの視点を理解することができた。

また、比べ読みをするにあたっては、「比べる言葉」や「比べる方法」を話し合い、何（人物の心情や生き方・考え方）を、どのように（情景描写や心情描写に着目して）読み取っていくのかということ明らかにした。

（二）二教材『主教材『海のいのち』と副教材『山のいのち』を比べ読み、作品の読みを深める。

情景描写や心情描写に着目して読み取り、それぞれに登場する人物の生き方や考え方が似ている所や違うところを比べながら交流した。

- C1 「海のめぐみ」について、おとうは、自分の実力ではなく海から与えられているあたりまえのものだと思っています。
- C2 そして、授かった物だから大切にしなければならぬと思っています。
- C3 「山のいのち」にも、「めぐみ」に人物が感謝していることが分かることがあります。それは、「山」にいわば食べるものはいくらでもある。食べるのは小さいのちだ。虫を魚が食べて、その魚をイタチや人間が食べる」ということです。
- C4 山のおかげで生きていることを言いたかったのだと思います。

このように、人物像を通して、海あるいは山の「めぐみ、いのち」について類似点を読み取ることができた。と同時に、作者立松和平の自然に対する思いに、より広くより深く迫ることができた。

比べ読んだ「海のいのち」と「山のいのち」を関連づけながら主題について、深まった自分の考えを次のように書いた。

○私は、立松さんの言いたいことは「自然を大切に」ということだと思っています。

最近、山では木が切り倒され、海では魚をとりほうだい。そのため、自然がなくなっていると思います。自然は一つ一つが「いのち」で、一つの「いのち」が消えたら全てがなくなり、人工的につくりだせないもの。つまり、かけがえのないものである。と立松さんは言っています。そして、これ以上自然をなくしてはいけません。自然をいつくしみ、大切にしたいと読者に伝えたいのだと思います。

○立松さんは、「自然」「めぐみ」を大切にしようとして、この二つの物語を通して訴えているのだと思います。

私たち人間は都合のいいように、木を切り倒し山をゴルフ場にしたり、海の魚をとりにぎてしまったりして、自然をはかれています。

私は「山と海のいのち」で、どんなに小さないのちでも大切なめぐみだということを知りました。そして、人間は他の生き物のめぐみにもなれず生きていることも知りました。立松さんから自然のめぐみに感謝する気持ちを持たなければならぬことを教えられました。

言葉に着目して二教材の比べ読みをすることで、共通する主題を読み取ることができた。と同時に、「海のいのち」と「山のいのち」を関連づけ、「自然」に向き合う人間の生き方について、立松氏の強い思いをとらえることができた。さらに、児童は身近にある問題にも目を向け、自然に対する自分の思いや考えも書くことができた。

### おわりに

本実践を通して、児童は比べ読みをすることで、物語文を読むことの楽しさを味わうとともに、二教材に共通する主題をとらえ、考えを深めることができた。

むらかわ けいこ 大阪府小学校教育研究会国語部の研究委員。いろいろな研究会で、授業や発表の機会を得、情熱をもって国語教育に力を注いでいます。現任校では、表現力の育成を全校の研究テーマにして研究活動に取り組んでいます。

# 他教科の学習や読書に生きるワークシートの工夫

— 六年「文章の構成を考えながら・  
宇宙からツルを追う」の指導を通して —

愛知県一宮市立大和東小学校  
長尾 幸彦

## はじめに

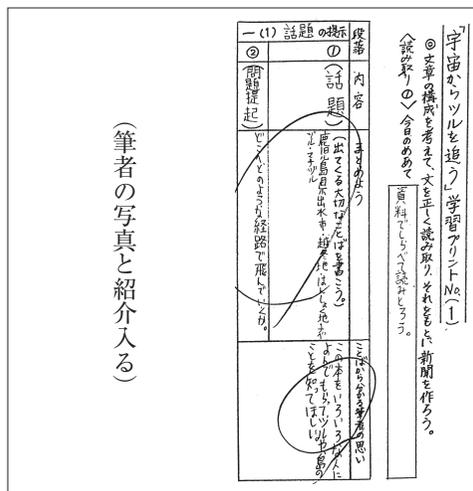
説明文の学習は、児童が自力で資料を読むことができるようになるための技能を身につける機会となるべきである。これが、本単元の指導のコンセプトである。六年生の学習として、これまで学んできた基礎的な技能の上に、他教科の学習や日常の読書に生きる学習は、大変意義があると考えた。

高学年になれば、調べたことを発表したり活用したりするために、資料を積極的に読まなければならない。そうした際、内容に合わせた整理の仕方を読み解いていく技能を身につけさせることが必要だと考えた。また、読書した際に、自分の力で読解する方法を身に付けることも不可欠である。そこで、段落ごとに要点をまとめる一般的なワークシートではなく、段落の内容に合わせてまとめ方を変え、いろいろな読み取り方を学べるシートになるよう工夫した。

## 読み取り方を学ぶシートの実例

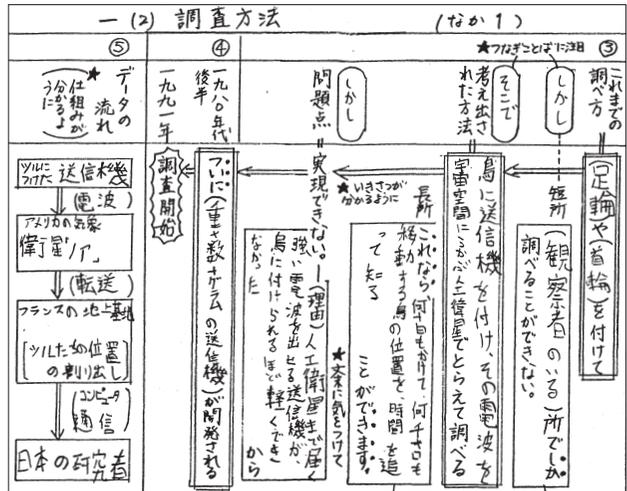
シート1 「段落1（1）話題の提示」  
資料を調べて読み取る。

説明的な文章の冒頭部分は、内容の概要を紹介する大切な部分である。キーワードや筆者の目がどこに向いているかが分かる部分である。この学習材（注）でも、ツルの越冬地である出水市や渡りをする動物であることなど、内容の理解に大きくかかわる言葉が出てくる。内容をまとめると同時に、筆者を紹介したプリントを用意し、筆者について理解を深めさせた。次に、キーワードを資料で調べさせた。出水市のホームページでは、おびただし数の鶴が集まっている様子が写真で紹介され、「二万羽ものツル」と書かれた文字の意味を具体的に感じることができた。説明文にも筆者の思いが大きく影響していることや読み始めの段階で内容に関する資料を読むことの大切さを伝えた。



シート2 「段落1（2）調査方法」  
流れ図に示して読み取る。

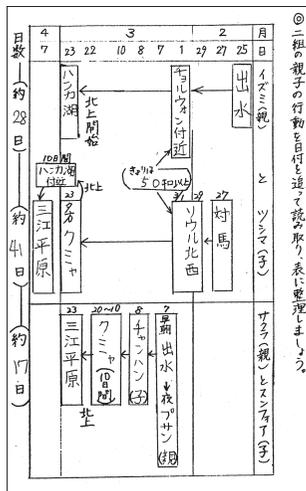
ツルの調査方法の変遷やその仕組みについて書かれたこの段落は、事実を確かめながら調査方法を流れ図でまとめた。教科書の挿絵にも、絵と言葉でまとめてあるが、流れを正確に読み取るために、シートの上段に指示語



や概要も分かる欄を作った。また、調査方法を示す言葉を抜き出させ、矢印で結んで調査の仕組みを整理させた。文章の内容を視覚的に理解させ、流れ図に整理してとらえる意義を伝えることができた。

**シート3**【段落2(1)ツルの移動経路】  
地図に示して読み取る。

調査によって分かったツルの経路について説明されている段落である。前半で、大まか



な経路が二つある事実、後半で、二組の親子のツルの具体的な経路が書かれている。学習材の文章を掲載し、文章を経路のまつまりごとに区切って記号をつけ、地図上に矢印をつけながら記号をつけた。地図をプロジェクトで投影し、記入しながら確かめた。移動の距離や方向、地名の位置を空間的、視覚的にとらえさせることができた。内容を空間的に表す利点を伝えることができた。

**シート4**【段落2(2)ツルの移動経路】  
表に表して読み取る。

シート3の後半を、表という別の形でまとめさせた。二組の親子ごとに、時系列に従って表にする。時系列に従って表すとそれぞれのツルが飛んだ期間や時期の違いが分かる。調べたい内容によって、空間的に表すのか時系列で表すのか選択する必要があり、それぞれ

れの利点を生かして選ぶ大切さを伝えることができた。

**おわりに**

読解力を高めるためには、読解の方法を知ることが重要である。そしてそれはいつも一通りではない。今回とった方法の他にも、要約の方法を学んだり、文章構成を学んだりする学習もある。それは、テキストで学ぶための方法であり、テキストの性質や、調べる目的によって変わっていくものである。どんな場合にもどの方法をとるのかを意識させて学習に取り組ませることが大切だ。その結果、読解力は高まり、他教科の学習で、さまざまな種類の文章を読んで調べるときにまとめ方を自分で変えられるようになる。また、説明的な文章を読書したとき、理解をより深めるために、内容の整理が効果的に行えるようになる。今後は、文学の読解にも役立つシートを工夫していきたい。

注  
東京書籍・平成14年度版『新しい国語 六上』

なお ゆきひこ ―宮市立大和東小学校に勤務。平成十三年度、全国実践国語フォーラムで、「調べる力を育てる言語活動」というテーマで提案。現在は、一宮市小学校国語教科等指導員を務める。

# スピーチ内容を文字カードにして見直す

大分県大分市立南大分小学校  
牧 英治郎

## スピーチ内容は、確実に伝わるか

教師が自己紹介したあと、「自分のこと」について話す「スピーチ大会」の活動を提案する。年度始めには、どの学級でも行われる活動ではないだろうか。自己紹介の延長線上にある活動と考えるのもよいか。

自己紹介では「印象度」が最も重要なポイントになる。つまり、話し手はどれだけ聞き手に印象を与えられるかを考えてスピーチ内容を構成しなくてはならない。ところが、話し手の「伝えたいこと（話の中心）」と聞き手に「伝わってきたこと（聞いたことの中心）」が一致していないことがよくある。ここに学習の芽があるのとらえ、学習展開を組織した。

### 子どもが課題を意識するまで

実際の授業実践における一人の子どもの姿で具体的に説明したい。前述の「スピーチ大会」後の感想を出し合う中で、Aさんのスピーチ

チ内容が話題になった。

Aさんは、体操選手として日ごろから練習に励んでいる。そして、ある体操の大会において見事二位に入賞した。そこで、「二位になった喜び」を中心にしてスピーチをした。しかしながら、聞き手には「二位になった喜び」を的確に伝えることができなかった。ここで、Aさんは『「自分（話し手）」の伝えたい思い』と『聞き手のとらえ』が不一致なのはどうしてだろうか」という課題を強く意識するに至ったのである。

## スピーチの内容に着目させる

音声言語のままでは話し合いをすすめる、話す態度や声量など話し方の技能面に着目する意見が必ず出る。これが話し合いの中心になってしまうと、なかなか内容に目が向かない。内容に目が向かなければ、五年生で指導するべき「構成」をとらえさせることも難しくなる。

そこで、Aさんのスピーチを文章に書き起こすことにした。このようにすると、子どもたちはスピーチ中に使用されたことばの数や文同士のつながりなどに気がつきやすくなる。技能の違いよりも文字化された内容の違いのほうに明確になるからであろう。

## Aさんのスピーチ

Aさんは次のようなスピーチをしていた。このスピーチ内容でAさんが「二位になった喜び」を中心に伝えようとするならば、⑧の文を強調すればよいことが分かる。

- ① 私の得意なことは、体操です。
- ② 去年、南大分スポーツパークで試合がありました。
- ③ 私は、試合のときは、ドキドキしてしやうがありません。
- ④ 私は、平均台がとても苦手です。

- ⑤でも、平均台の上でバック転をします。  
 ⑥平均台の上でバック転は、とてもこわいです。  
 ⑦試合で、平均台のとき、ドキドキしたけど、バック転が終わったとき、ホッとしました。  
 ⑧結果は、平均台で二位だったのであつれしかつたです。  
 ⑨これからも、体操をがんばりたいです。

⑧の文の前後に間をおいて、ゆっくりと、他の文よりも声量を多くしてスピーチする方法でもよいだろう。つまり「間・速さ・声量」といった技能で強調することは可能である。しかし、技能を磨く以前に、⑧の文が強調されるようにスピーチ内容の構成を見直すことが大切である。このスピーチ内容のままでは、明らかに「二位になった喜び」が説明不足であるからだ。

### 書き直しの視点をとらえたAさん

Aさんは、スピーチで「二位になった喜び」を伝えたいと思っていた。ところが、聞き手の大多数は「平均台の難しさ」や「平均台が苦手」という内容を中心にとらえた。このような不一致が生じたのは、Aさんのスピーチ

に「平均台」に関する内容が数多く含まれていたためである。

多くの子が理由にあげたのは、「平均台」に関する内容が、④～⑧の五文に含まれているのに対して、「二位」に関する内容が、⑧の一文にしかないことであつた。

また、「平均台」については「バック転」や「ドキドキ」ということばでのつながりもあり、説明が多い。

さらに、「始め」と「終わり」については、「体操」ということばでまとめている。

このことから「二位の喜び」を中心に聞き手に伝わるように話すには、「二位に関する内容を表す文」を増やせばよいことが新たな視点として導き出されたのである。

Aさんは、「二位の喜び」を協調する内容として、「はじめて二位になった」や、「一位との差がわずかに〇・一点であつた」ことを増やしてスピーチ原稿の書き直しを行った。このことから、学習でつかんだ視点をもって見直しをしたことは明らかである。

### 文字カードにして見直す

Aさんが、このような見直しをしたのはなぜだろうか。Aさんに、友達との話し合いで出された意見を受容する態度があつたことは疑いの余地がない。

しかし、最大の理由は、話した内容を文字化して認識しやすくしたことではないだろうか。このことは、「書く」と「話す・聞く」の関連の重要性を示しているともいえそうだ。スピーチ全体の長さや一文の長さを短く設定していたことも見直しに有効だったと考えられる。また文字化するときには、一文ごとに短冊カード状にし、繰り返しされることばについては、単語カードにした。つまり、文字化してカード状にすることで、比較・関係付けしやすくなったといえる。

五年生としては、「構成順を変えて『二位』を始めに持ってきて強調する」「『二位』を始めと終わりに入れて繰り返し」「インパクトのあることばを付け加えて印象づける」という考えも欲しかった。しかし、本実践では、年度始めという時期から考えて、子どもたちとともに導き出した結論を尊重し、内容を増やして構成すれば強調できることをおさえた。

まき えいじろう 大分県小学校教育研究会国語部  
 会研究部長・大分県学校図書館協議会事務局次長  
 日々、国語科学習を子どもたちとともに楽しんでいます。

## 論理的思考力をはぐくむ 説明的な文章の学習指導の在り方 — 結論から読み取る実践を通して —

茨城県筑西市協和中学校  
中島 聡

### はじめに

平成十九年度茨城県で開催された「第五〇回全関東地区 中学校国語教育研究協議会 茨城大会」で発表した内容に基づき、指導の実践を報告するものとする。実践は、第二学年でおこなったが、三省堂出版による中学一年『現代の国語1』から「クジラの飲み水」を教材として実践にあたった。

### 一 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成十年十二月文部省）国語の（第二学年及び第三学年）2内容C読むことに「書き手の論理の展開の仕方を的確にとらえ」とある。さらに、平成十四年に実施されたPISA調査では日本の読解力の低下が報じられた。

そこで本実践では、説明的な文章の学習において、論理的思考力思考力を育成するためには、どのような指導が有効であるかを究明

したいと考え、本主題を設定した。

### 二 研究の概要

#### (1) 研究のねらい

説明的な文章の学習において、論理的思考力を育成するためにはどのような指導が有効であるかを究明する。

#### (2) 基本的な考え

#### 論理的思考力

『教育学大辞典』では、論理的思考力を次のように定義している。「単数あるいは複数の条件（命題）から、ある必然性をもったいくつかの結論を導き出すための思考の過程をいう。」これは、ある物事を筋道立てて考える力であると考えた。

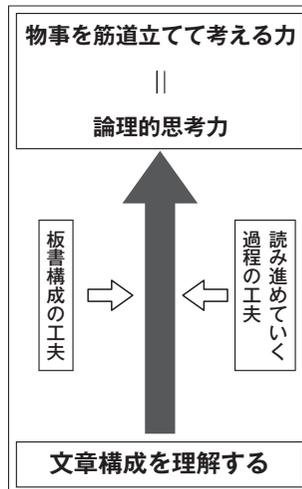
ほとんどの説明的な文章は、論理的に書かれた筋道の通った文章になっている。その文章構成を読み取る活動を繰り返すことで、筋道を考える力が育成できると考えた。

### 三 指導の実際と考察

#### (1) 単元名 クジラの飲み水

#### (2) 目標

- ① 「クジラの飲み水」の読みの活動を通して、文章構成をとらえ、自分の表現に生かそうとする。（関心・意欲・態度）
- ② 結論から読み取る活動を通して、筆者の論の展開の仕方を理解することができる。（読むこと）
- ③ 指示語、接続語に注目し、段落の関係を考えることができる。



(言語についての知識・理解・技能)

### (3) 教材について

本教材は、クジラがどのようにして飲み水を得ているのかについて書かれた説明的な文章である。接続語や指示語を巧みに使いながら、論理的に書かれ、文章構成もすっきりしたものである。

また、本教材をなぜ二年生で取り上げたかについては次のような理由からである。

第一に、文章の長さが適当であることである。第二に、内容がとらえやすいということである。難易語句も多くはない。第三は、生徒が興味関心もちやすい内容であることである。「クジラの飲み水」という題名から、クジラが海水から水分を得ているように想像できるが、実際にはそうではないので、驚きや疑問をもちながら読み進めていけると考えた。

### (4) 授業の実際

#### 【初発の感想】

ほとんどの生徒は、「クジラは体内で水をつくる」ということが理解できている。これは、本教材の結論でもある。しかし、数名の生徒は違う観点から感想が書いてあった。

#### 【文章構成をとらえる】

本教材、本文を一枚の用紙にまとめることによって、文章構成がとらえやすくなると考えたからである。

まず、問題提起部分である序論を、次に問題の答えとなる結論を見つけさせた。問題はすぐに見つけ出すことができたが、結論を短時間で見つけられなかった生徒が多少いた。結論部分の文頭の「このように」という言葉に着目できた生徒は、短時間で結論を見つけたことができた。しかし、最初から順に丁寧に読んでいった生徒は、なかなか結論が見つからずに、多くの時間がかかった。また、結論を見つけ出せなかった生徒の初発の感想を見てみると、「クジラは体内で水をつくる」ということに触れていないことがわかった。

#### 【序論→結論→本論の読み取り】

文章を書く際にも、結論を頭に入れて書き始める。また、物を作るときにも完成品のイメージが頭にある。つまり、結論部分となるものを頭に置きながら、文章を書いたり、物を作ったりする。つまり、序論にある問題提起文を押さえ、次に結論を押さえることで、文章構成が理解しやすくなると考えた。

本論の読み取りでは、結論を導くための説明が順序立てて書かれているので、結論と本論の記述を同じ色のペンで結びつけながら読み進めていった。

#### 【読み書き関連学習】

読み取り後、全文を要約した文章を書かせた。その際に、結論部分から書き出すこと、そ

の後根拠となる文を書くように指示した。この要約文の活動をおこなうことで、教材文がより理解できたという生徒が多く見られた。論理的思考力を育成するという視点から見れば、読み書き関連学習が有効であることは、他の論文からも明らかである。中でも青木幹勇氏は著書「第3の書く」の中で、読み書き関連学習のメリットについて多くの点を指摘している。

本実践では、読むことについての研究をより深めるということから、読み書き関連学習について触れてはない。

## 四 成果と課題

序論の次に結論を読み取り、その後結論の裏付けとなる本論の展開を読み取るという流れをとることで、短時間で文章構成や内容の把握ができることがわかった。

課題として、生徒がさらに意欲的に取り組める説明的な文章の読み取り方の研究を進めていきたい。

なかしま さとし 平成十八、十九年度と全関東地区茨城大会の読むこと（説明的な文章）における推進委員として、多くの先生方から論理的思考力を育てることについて学ぶ。「読むこと」の楽しさを生徒に学ばせたい。

# 自分の考えを深める価値ある話し合い活動のための取り組み

## 「パネルディスカッションをしよう」(三年)の実践から

神奈川県横浜市立錦台中学校

山内 裕介

### 育成を目指す学力について

学校生活の様々な場面で、話し合いは行われる。しかし、人の話を聞かず自分の考えに固執したり、発言することに意味を見出せず沈黙を守ったりする生徒の姿が見られることがある。活発に意見を交換し、自分の考えを広げたり深めたりするような価値ある話し合いはなかなか難しい。

そこで、次のような学力の育成を目指した実践を行った。

相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合うことを通して、自分の考えを深めることができる力

本稿では、右の学力育成を目指した実践で私を取り組んだことを紹介する。学習材とし

ては、「パネルディスカッションをしよう」(『現代の国語3』三省堂)を使用した。

### 学力育成のプロセス

#### 第Ⅰ次(一時間)

- ・本単元のねらいとパネルディスカッションについて理解する。
- ・パネルディスカッションのテーマに対する自分の立場を決める

#### 第Ⅱ次(四時間)

- ・テーマに対する自分の考えをまとめる。
- ・同じ立場のグループで話し合い、考えをまとめる。

#### 第Ⅲ次(一時間)

- ・この学習を通しての振り返りを一〇〇〇字程度にまとめる。

### 目指す学力育成のために

「話し合い」に関わる学力の育成においては、

「何を」「何のために」「どのように」話すのか、ということ学習者がきちんと理解した上で話し合い活動を行うことが必須である。そこで、次の三点を意識して指導を行った。

#### ①テーマの設定について

話し合うテーマについては学習者自身で決められるのがベストだが、なかなかうまくはいかない。本実践では、「高校入試はどのような方法にするべきか?」というテーマを提示した。テーマに対する立場として「中学の成績のみ」「当日の試験のみ」「学区制(選抜はなく地域ごと指定の高校へ進学)」の三つから学習者が選択し分かれた。テーマ設定の理由として、「何が一番よいか」ということを決めるのではなく、お互いに考えを交流することで、進路決定に対する自分の考えを広げたり深めたりしていきたい、という趣旨を伝えた。

中学三年生にとって切実な問題である。それぞれの中学校生活、将来への不安・期待、

学力・学習成績などの自分の考えの背景にある問題を、自分をさらけ出すように話す姿が多く見られた。お互いを尊重して聴き合う話し合いのできるテーマを設定できたと考えている。

## ② 目指すところの明確化

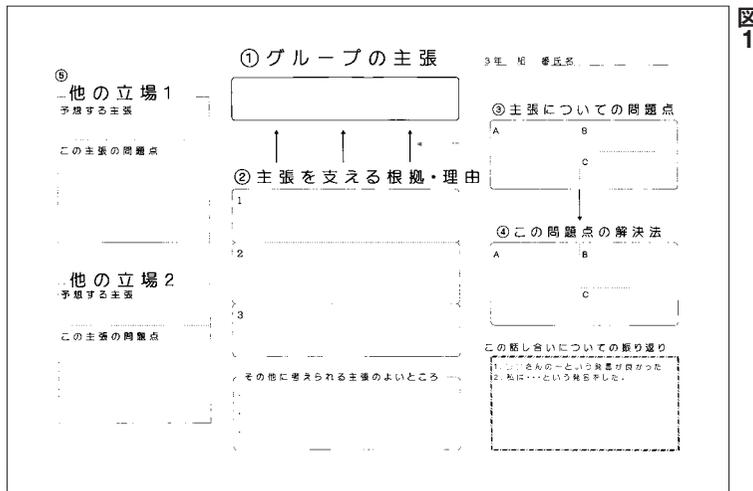
「何のために話すのか」ということが明確でなければ、話し合いは目指すところを見失い空回りすることになる。学習者が目指すところを意識しながら学習活動をするために、「話し合いを通して自分の考えを深める力」という目的を、私のことばで繰り返し示した。また、話し合いを進めていく中で、その育成につながる活動を指導の各段階において繰り返し行った。

第Ⅱ次が、話し合い活動の中心である。学習者は「個」の活動で考えをつくった後、「グループ」「全体によるパネルディスカッション」と段階的に考えの交流を行っていった（「個」においても交流はある）が、話し合いの最後に必ず「印象に残った発言」「自分はどういうような発言をしたか」を書く活動を行った。話し合い活動のリフレクションという意味とともに、それを書くために（Ⅱそれを意識して）話し合い活動が行われるようにするためである。そのように育成を目指す学力と学習活動をつなぎ、段階的に繰り返し行うこ

とで、目指す学力の確実な育成を図った。

## ③ 話し合いのひな型を設定する

話し合い活動を活性化し、その中で学習者が実際にに行っている知的活動が、ねらいとする学力の育成ときちんと繋がっているものでなければ力はない。そのために、話し合



## まとめ

以上のような取り組みの結果、パネルディスカッションでは活発に意見交換がなされ、第Ⅲ次での振り返りからは、話し合い全体を通して、多数の学習者が自分の考えを深めていったことも明らかになった。

やまうち ゆうすけ 教職に就いて六年目になります。学び合う教室、生徒を成長させられる教師を目指して奮闘中です。

# 身に付けた力を生徒が実感する授業づくり ―「読むこと」の指導における 司書と連携した授業実践から―

長崎県佐世保市立相浦中学校  
前田 和子

## はじめに

長崎県教育委員会は、小中学校で身に付けなければならぬ国語の力をわかりやすく示した「国語力向上プラン」リーフレットを作成している。また、その中で、九年間の学びのつながりを踏まえた授業、授業の目標（ねらい）を明確にした授業等の授業づくりのポイントを八点あげて、全県的な国語力向上に取り組んでいる。

これを受けて、私も「生徒に本時の学習目標（身に付けたい力）を明確に意識させ、教師が手だてを工夫すれば、生徒は自ら学び、その成果を実感し、確かな国語力が定着する」という視点を持って、授業改善に取り組んでいる。

様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身に付けること

〈学習指導要領 読むこと 力〉

今回は、この力を付けることを目標とした実践について報告する。

## 実践例

### 「ブックトークをしよう」（全体計画）

- ①ブックトークを知る。
- ②ブックトークの作り方を知る。  
テーマ設定（くだけどく）
- ③選書をする。（三分野以上五冊）
- ④話のつながりを考えて構成をする。
- ⑤シナリオ原稿を書く。
- ⑥発表練習
- ⑦発表

〈全十時間〉

## 1 単元導入の工夫

本単元の目標を達成するには、「①様々な文章にふれること」「②必要な情報を得るための選書を行うこと」が本単元の「読むこと」の学習成果を大きく左右すると考えて、次の

ような二つの工夫を行った。

まず、ブックトークのテーマを「くだけどく」（例：寒いけれどあったかい）というやや漠然とした指示にすることによって生徒が自ら課題を設定し、課題を解決する学習活動を仕組むことで、国語力の定着を意図した。

次に、三、四人の小グループでNDC分類で三分野以上の五冊を選書するという課題を与えた。それぞれが選んだ図書を比較検討し、必要な情報を集める楽しさの中に学び合いをさせることを意図した。

### 生徒が設定したテーマと選書の例

テーマ 不可能のようだけれど可能  
選書

- ①エジソン（289）
- ②ユビキタス（500）
- ③とべバツタ（913）
- ④幸せのちから（936）
- ⑤ギネス2007（033）

（ ）内はNDC分類番号

## 2 学校司書との連携

本単元では、学校司書と連携した授業を試みた。司書の役割を次のようにした。

〈単元の導入〉ブックトークの示範、選書のポイントや効果的な本の探し方の説明  
〈単元の展開〉必要な情報を集めるための選書や読み方の指導

〈単元のまとめ〉相手意識を持った話のつながりや表現についての指導と評価

学校司書の持つ「ブックトーク」に関する専門的知識、技能そのものを学習材として活用するという試みである。司書の存在が豊かな学びを支えた。

## 3 自己評価による身に付いた力の確認

生徒は、自らが付いたと感じた時に達成感を味わい、学習意欲を高めさらに力を付けた。

本単元第三時の自己評価から

\*自分にどんな力が身に付いたか。

- ・いろいろな本を読む力
- ・テーマに沿って本を選ぶ力
- ・つながりやを考えて構成すること
- ・自分の考えで、テーマに沿って話をつなげたこと。それをみんなに上手に伝えられたこと

生徒は自らの学びの成果を確実に味わった。

## 4 単元展開の工夫

選書をした次の時間、生徒たちはただひたすらに本を読んだ。今までふれようとしなかった分野の図書を手に取り、互いに内容を教え合った。

学習が進むにつれ、生徒が実感したのが、うまく話し合いをしないと学習が進まないことである。進んで話し合うようになった。

自分が選んできた本をなかなか譲らない場面もあった。

- ・テーマに沿った選書のために必要とする図書の分野について話し合う
- ・五冊に絞り込むために話し合う
- ・話のつながりやを考えた構成をするために話し合う
- ・前後のつながりやそれぞれの工夫の仕方について話し合う

話のつながりが理解できていないと、紹介文が作れない。題名読みで選んだ本がつながらないと言っては図書館に足を運ぶ。アドバイスを司書や教師に求めてくる。課題解決を図る中に確かな学びが見えてきた。

## 5 生徒の変容

情報を集めるためにひたすらに本を読み、

必要な情報を要約する。その要約を班員にわかりやすく伝える。文の組み立ての効果を考えて原稿を作成する。相手意識を持って効果的に話す。生徒たちは、常に課題意識を持って取り組んだ。目標（身に付けたい力）を明確にし、自ら学び、その成果を使い生かす場を設けることによって、生徒は既存の国語力を駆使しさらに力を付けていく。確かな学びがそこに生まれた。

## まとめ

国語の授業は様々な形で成立する。しかし、どのような力が付いたかの検証や生徒自らがその力を実感する場の設定が不足しているように思う。

理解し、考え、感じ、想像し、表現する。これらの生きて働く国語の力が身に付いたと生徒が実感できた時、確かな国語力が定着する。そして、それは、私たち国語教師が生徒の実態に応じた工夫を重ねることによってなされるのである。今後も、確かな国語力の定着を目指した工夫と実践を重ねていきたい。

まえだ かずこ コミュニケーションの基盤となる言語活動の実践に取り組んでいる。「ことばの学びを拓く」(苦の会)にて実践執筆。

授業のヒント

# 書 写

— 第 2 回 —

## 授業の10分間を 利用して

安田女子大学  
谷口 邦彦

### 書写と書道は同じなの？

筆者が書写の授業に関わるようになったのは中高一貫校に赴任してからのことである。それまでは書道のことしか知らず、いきなり国語科の先生方の中に入って戸惑いを覚えた。その後、国語科の一員としてあれこれ実践していくと、書写の持つ役割が多少見えてきた。

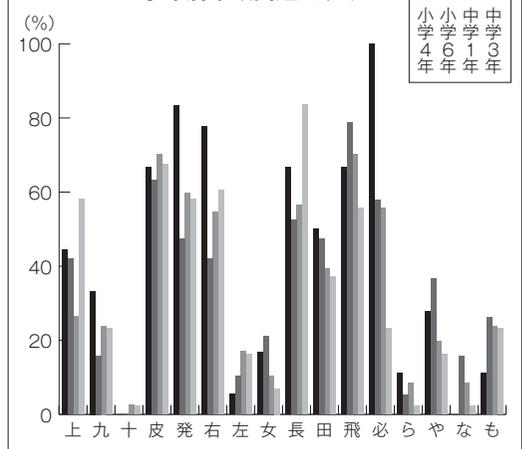
戸惑いを覚えたのは、国語科における「文字を書くこと」は書道のそれとは異なるということだった。言うまでもないことだろうが、書道しか知らない筆者にとっては当初、若干の意識変革が求められた。「きれいな字は読みやすい」に間違いないが、「きれいな字」のみを求めるのが国語科書写の役割ではないということに気づかされたのである。

書写を書道と同じに扱われる状況があることは、文字文化が毛筆を使うことで培われてきた歴史からすると致し方ないこととはいえ、少し残念な気もする。むしろ、国語科に位置づけられる書写なのであるから、国語科に必要な「文字を書く力」を国語の先生方から堂々と教えていただきたい。字の上手いも下手もないと思います。

### 短時間で言う演習

前回は、「毛筆で文字感覚の確認」することを紹介した。国語科で文字文化を扱うことはもちろん大切なことであるが、このことだけを念頭においてしまうと、書写の役割から離れていってしまう。前回も述べたように、生徒の実態に目を向けると、いくつも課題が見えてくる。国語の教師として放置できない

学年別筆順間違えグラフ



実態が、文字を書くことにもありはしないか。書写授業は毛筆を使わなくとも可能である。つまり硬筆筆記具での授業も考えられる。硬筆筆記具ならば準備が必要ないので、国語授業のどのタイミングでも行えるという利点もある。

書写の力は、年間指導計画のもと適切に行われて初めて身に付いていくものだろうが、短期間に継続して行う方が効果的な場合もある。実際に国語授業の中では、ちよつとした時間を利用し、さまざまなドリル的な演習が行われている。そこに書写の内容を組み込んでもらえたなら、子どもの書写力はもつと

伸びるだろうと考える。

ところで、勤務校のことであるが、先日締め切られた卒論の中で、一人の学生は筆順の実態調査の結果をまとめていた。小学校四年生、六年生、中学校一年生、三年生の各学年で「筆順指導の手びき」に示される筆順の定着率を調べたグラフである（P.28参照）。五校、わずか三百名ほどを対象にした調査であり、地域にも偏りがあるから、これが子どもの傾向であると考えていたが、これが子どもの傾向でも子どもの実態の一例として紹介しているつもりである。

筆順の指導は、面白くない授業になりがちである。工夫しなければ押しつけの展開になってしまうからである。教師としてはあまり扱いたくない内容である。

だからといって、例えばこのグラフにあるような実態を見過ごしていいものだろうか。筆順は、字形を整えて書くこと、速く書くこと、漢字を覚えることに欠かせないポイントである。「右」字を「左」と同じ筆順で書く子どもがクラスの半数以上いれば、何らかのフォローがあつて当然だと思ふ。

余談になるが、「必」を四年生全員が間違えている。実は、この調査をした時点では、「必」を学習していなかったのである。このことから学習することの大切さを改めて考え

させられる。

### ドリル演習の具体例

ここでは、中学校での授業を想定している。筆順の定着度を改善したいが、一時間の授業を確保するのは難しいという場合、国語授業の10分程度を使ってドリル的な手だてを考えたみたらどうだろうか。例えば次のような簡単なプリントを用意するだけでよい。

○次の漢字を筆順の原則で分けるとどうなるか。  
同じ仲間に分けてみよう。

右	及	左	延	方	皮
広	区	石	成	力	題
在	布	九	近	有	勉

筆順は小学生にも覚えやすいように、十あまりの原則でまとめられている（『筆順指導の手びき』文部省 昭和三十三年）。「必」や「飛」のように例外として特別に覚える必要があるものもわずかにあるが、原則を組み合わせていけば、画数が多い漢字も効率よく書ける。筆順は一文字ずつ覚えるのではなく、原則を把握することが大切である。

勤務校の大学生の実態も先の調査結果と大差はないが、授業開始の短時間を利用したこ

のドリル演習（扱う漢字は入れ替える）五回ほどで全員が改善できている。

### アイデアは生徒の実態から

その他、筆者がドリル的に行ってみたものに、次のようなものがある。

○丁寧を書くことに関して（中一）  
「詩を書く」

・（まど みちお）の詩が生徒に好評。

○速く書くことに関して（中二）

「社会科や理科の教科書から」

・ 50字程度を時間を計測して二回書く。

国語教師の目から見る時、子どもの実態の改善を考えると、アイデアはいくつも浮かぶことだろう。

プリントの答え

（右）	有	布	（左）	在
（延）	区	近	（題）	勉
（方）	力		（及）	九
（皮）	成		（広）	石

たにぐち くにひこ 安田女子大学准教授。広島大学附属中・高等学校教諭を経て、○三年度から安田女子大学勤務。おもに、書写書道の学習内容、方法の改善に関する提案を行っている。

# 新しい辞書を手にして

『三省堂国語辞典』編集幹事

市川 孝

## 新しいことばを求めて——用例採集

現代語の辞書の内容を手落ちなく改訂するためには、増補すべき新語を選定したり、新しい意味・用法を追加したりする必要があり、そのために何よりも重要なことは、実際に使われている語の用例を数多く採集することである。用例採集のことを「ワードハンティング」（和製英語）とも言う。

『三省堂国語辞典』の、言わば生みの親とも言うべき見坊豪紀氏（一九九二年に逝去）は、新聞・週刊誌・放送などからの用例採集を、一日も欠かさず続けてきた。その作業は、五十年にも及び、用例カードは百四十五万枚に達した。それを元にして、この辞書のそれぞれの改訂版に、毎回、数千もの新規項目を

加えてきた。この辞書は、小型辞書であるにもかかわらず、大型辞書をしのぐほどの新語や新語義を収録して、「生きのよい現代語辞典」として世間に評価されてきたのである。その伝統は現在も引きつがれている。

見坊氏の観察によれば、ことばは常に音もなく変化していき、一日当たり三つの新語が生まれる計算だという。このような状況に対処して、新語や新語義を追い求めるためには、見坊氏のような人のいない現在、多くの人の関与が必要となる。

三省堂には、すでに辞書改訂のための新語データベースがあり、今回の第六版の編集では、その新語データベースを多く利用した。さらに、編者や編集部それぞれの見地から採集した多数の用語・用例を活用した。筆者

## 今回の辞書



『三省堂国語辞典 第六版』  
三省堂／2008年

も、及ばずながら、長い間、新語や新語義の採集を行ってきた。筆者の場合、主として新聞一紙を毎日約四時間かけて精読する方法をとった。そのほか、週刊誌・月刊誌・テレビ放送などからも、多くの用語・用例を採集した。

## 辞書への収録

新聞などを読んでいて、知らない新しいことばに出くわすことがある。新しく使われることばにはカタカナ語が多い。とりわけ英語が多く流入し、訳されることもなく、そのまま新しいカタカナ語として取り込まれたりする。また、制度の改革、各種研究の進展、物の考え方の変化などに伴って、新語が次から次へと生まれてくる。

このような多数のカタカナ語や新語のう

ち、現代人にとって必要不可欠なものは、是非とも辞書に収録する必要がある。それらが新規収録語の中核をなす。第六版所収の例をいくつか挙げてみよう。(順不同)

ポピュリズム／ハザード マップ／ワーキングプア／トリアージ／ワークライフ バランス／メタン ハイドレート／中等教育学校／准教授／第二新卒／猛暑日／脂質異常症／地産地消／特区／メタボ イオ燃料／発光ダイオード／法テラス

若者ことばや俗語の収録もゆるがせにできない。若者ことばや俗語は多種多様であるが、その中で定着しそうなものを選択する必要がある。例えば、

逆ギレ／むずい／パニクる／つゆだく 駅ナカ／目ぢから／ていうか／キャラなどは収録されたが、「KY」(空気が読めない)などは、一過性の流行と考えて、収録は見送られた。

なお、この辞書の第五版・第六版では、外国人留学生の読者を想定して、外国人にとって理解がむずかしいとされる擬声語・擬態語を多数収録した。

第六版では、新規収録語とは別に、今までの収録語について、その語釈を修正・改善したり、用例を加えたり、新しい語義を補充収

録したりした箇所がきわめて多い。例えば、「かむ(噛む)」の項に、従来の語釈にはなかった、次の語釈・用例を加えた。

②(「舌をかむ」ことばがつかえたり、言いまわしがえたりする。「何度も」)

「エンジン」の語釈は、従来は「発動機」としかなかったものを、次のように詳しくした。

①内燃機関。②原動機。「―をかける」③コンピュータで「データ処理を実行する」。④原動力。「地方分権の―」

### 辞書に親しむ

筆者の中学生時代、地理のたいへんよく出来る級友がいたが、彼は昼食の弁当を広げながらも、いつも地図帳をかたわらに開いて、楽しそうに眺めていた。

長年、国語辞典の編集・執筆にたずさわってきて、「辞書は地図帳に似ている。」などと考えることがある。

辞書は、限られたスペースに大量の見出し語・語釈その他を載せている。ページ当たりの情報量の多さでは、辞書の右に出る本はあるまい。地図帳も、そのページ当たりの情報量の多さにおいて、辞書に引けを取らない。そう考えれば、辞書も地図帳も安いものだ。

辞書は多くの場合、ことばの意味・用法を

知るとか、書きあらわし方を調べるとかいうような、実用上の必要があつて引くものだが、それだけではなく、いつも手近に置いて、気の向くままに引いてみるのもおもしろい。ことばの森に分け入って、そこに並んでいる、さまざまな語句たちと対面すれば、それだけ自分自身のことばの世界が開け、語句や漢字に対する能力や感覚が育ち、語彙も豊かになるにちがいない。地図帳も、普通、必要があつて利用するものだが、暇なとき、気楽に地図帳を広げること、いろいろな地域の情報を仕入れ、また、まだ見ぬ土地に遊ぶことができる。

ことばは時代とともに変化し、新しい語が次々に生まれ、表記もしばしば改められる。辞書はやはり新しいものを用意する必要がある。新しい都市や道路や鉄道の載った地図帳が必要であるように。

「新しい辞典を買うと心が豊かになるのを感じる。」と言った人がいる。新しい辞書を手にして、それを友とし、親しむことによつて、心も豊かになるであろう。

いちかわ たかし 一九二七年、長野県生まれ。東京大学文学部国文学科卒業。国語学を専攻。国立国語研究所員、お茶の水女子大学教授を経て、現在、同大学名誉教授。

# す て き な 本 た ち

～子どもたちとのふれあいの中から～

## 第 2 回

### 石井桃子さんの作品は、いつまでも

教文館

子どもの本のみせ ナルニア国

土屋 智子

ナルニア国では、月替わりでいろいろなフェアを行っています。たいていは子どもの本の作家、画家にちなんだものですが、開店から十年近くたち、その数も百近くとなりました。多くのフェアの中にあつて、未曾有の大盛況となったのが昨年三月に行った『石井桃子さん、一〇〇歳おめでとう！』の催しでした。

石井桃子さんは、『ノンちゃん雲に乗る』などの著作、『クマのプーさん』や『ピーターラビットの絵本』シリーズなどの翻訳で有名ですが、それ以外にも日本中に「子ども文庫」が生まれるもととなった、岩波新書『子どもの図書館』や、読売文学賞受賞の小説『幻の朱い実』も著されています。そして、二〇〇七年三月一日に、お元気で一〇〇歳を迎えられました。

このフェアは、あまりにも印象が強く、また、石井桃子さんという方が日本の子どもの本にとっていかに大切な方であるかがわかればわかるほど、それを表現する言葉がなく、もどかしい思いに駆られるばかりです。

約一ヶ月のフェア中は、毎日毎日クリスマス並にたくさんのお客さんが売れると同時に、お客さまの熱い思いに触れる日々でもありました。カウンター越しにその本についての思い出を語る方、このために、遠方からいらした

方もおおいに楽しかったです。

書店員として何より驚いたのは、店中が石井桃子さんの本で埋め尽くされた光景でした。平台すべてに石井桃子さんの本が並び、どの台も存在感を主張する姿は壮観でした。

私自身、石井桃子さん作の小型絵本『やまのこどもたち』は幼い頃の愛読書でした。山里の暮らしなど知らないのに、読みながらとてもリアルに作品中の子どもたちの遊びをいっしょに楽しんでいました。春、梅の花や松葉でおままごと、夏、高い木に登って降りられなくなったり、深い雪に埋もれた年越しのようすなど、短編映画を見ているかのようによみがえってきます。どうか、今育つ子どもたちも、あの美しい日本語にふれてもらいたい、心からそう願っています。



『やまのこどもたち』  
石井桃子＝文  
深澤紅子＝絵  
岩波書店／1956年

つちや ともこ 教文館 子どもの本のみせ ナルニア国店長。公立図書館員、日本図書館協会・児童基本蔵書目録作成委員会（非常勤）などを経て現職。

# 習得・活用・探究の 授業をつくる

# 「読解力」とは何か

Part III

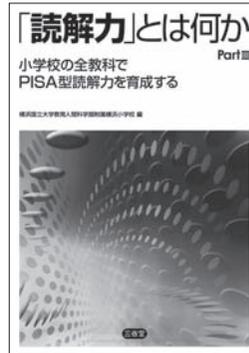


**PISA型「読解力」を核としたカリキュラム・マネジメント**

横浜国立大学  
教育人間科学部附属  
横浜中学校 編

2008年  
春の新刊

定価1,995円(税込)  
B5 / 132ページ



**「読解力」とは何か**  
Part III  
小学校の全教科で  
PISA型読解力を育成する

**小学校の全教科で  
PISA型読解力を  
育成する**

横浜国立大学  
教育人間科学部附属  
横浜小学校 編

2008年  
春の新刊

定価1,995円(税込)  
B5 / 168ページ

平成20年告示の学習指導要領では「習得・活用・探究」の学習プロセスが目目される！ その解説と中学全9教科の指導案、すぐのできる24本の実践アイデアをいち早く紹介。学校での取組を充実サポート！

新しい学習指導要領の下では、言語能力の育成は、国語科だけでなく全教科の課題となることは明らかである。本書は、「読解力」育成を目指した小学校全教科の実践から、くわしい解説と指導案を提案する。

## 「読解力」とは何か

## 「読解力」とは何か Part II



**PISA調査におけるリーディング・リテラシー「読解力」を核としたカリキュラムマネジメント**

横浜国立大学  
教育人間科学部附属  
横浜中学校 FYプロジェクト 編

定価1,995円(税込)  
B5 / 112ページ



**「読解力」とは何か**  
Part II  
カリキュラム・マネジメントで  
年間指導計画・学習プロセス重視の指導案

**カリキュラム・マネジメントで  
年間指導計画・学習プロセス  
重視の指導案**

横浜国立大学  
教育人間科学部附属  
横浜中学校 編

定価1,995円(税込)  
B5 / 152ページ

三省堂 国語教育 **11月号の学び** 第16号

〔発行所〕  
株式会社 三省堂  
〒100-8371  
東京都千代田区三崎町二丁目一四  
TEL 〇三(三三三三)九四二七(編集)  
振替 東京 〇〇一六〇五五四三〇〇  
泰成印刷株式会社  
東京都墨田区両国三丁目一

〔印刷所〕

二〇〇八年五月一四日発行  
定価 一〇〇円(本体九六円)  
編集・発行人 八幡 統厚

### 編集後記

学生時代、ペアを組んだクラスメートと英語で自己紹介をする授業がありました。話題の中心はお互いの趣味について。なるべく多くのことを聞き出すことが目的でしたが、相手の話が具体的に面白くないので、うまく質問できません。相手の趣味に詳しくないので英語が出てこず、聞きたいことがうまく伝わらないのです。このとき、ボキャブラリーが足りないのと話か思うように深まらないのだと気づきました。

社会人になった今、使うことばは母語ですが、同様のことを(より痛切に……)感じています。手元の辞書を引く頻度も、学生時代より高くなった毎日です。(S)



# 声を届ける

音読・朗読・群読の授業

高橋俊三 著

定価2,520円(本体2,400円+税) / A5 / 232ページ  
ISBN978-4-385-36359-2

著者の長年にわたる理論的・実践的研究の成果を凝縮。意味をとらえ、声を届けることの重要性を提起する。授業を行う際のポイントが明快に示され、声に出して読む学びの楽しさが伝わってくる。音声CD付き。



## 直観からの出発

読む力が育つ「丸ごと読み」の指導

田中智生・小川孝司 監修  
岡山・小学校の国語を語る会 編

定価1,995円(本体1,900円+税)  
B5 / 160ページ  
ISBN978-4-385-36357-8

生活に生きる「読む力」をどう育てるか。直観から出発し、大局的な読みと分析的な読みを織り交ぜて読み進める「丸ごと読み」の指導法を、授業実践を通して具体的に示し、その成果と可能性をあきらかにする。



## 論理力をはくくむ 国語の授業

長崎伸仁・山口国語授業研究会 著

定価2,415円(本体2,300円+税)  
B5 / 184ページ  
ISBN978-4-385-36337-0

国語力を支えるのは論理力である。論理力育成のために、国語の授業をどう変えてゆくか。小・中学校の読解教材(文学・説明文)を教材の論理と子どもの論理からとらえなおし、新しい授業のあり方を追究する。



# 三省堂 第六版 国語辞典

[編者]  
見坊 豪 紀  
金田 一 京助  
金田 一 春彦  
柴田 武  
市川 孝  
飛田 良文

並版 定価2,835円(本体2,700円+税) / B6変 / 1,632ページ  
ISBN978-4-385-13925-8  
小型版 定価2,625円(本体2,500円+税) / A6変  
ISBN978-4-385-13169-6

2008年1月10日発行

## 桑ノコク 生きのよい現代語辞典[三国]大改訂! 新たに4,000語を追加!

- 膨大のことばのデータベースを基にして8万項目を収録。
- ほかの辞書にはない新語・新用法を多数登載。
- 文化審議会答申「敬語の指針」に対応した解説。

詳しくはwebサイトをご覧ください → <http://www.sanseido.co.jp/>

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--